

日整会員は日頃から整復固定技術の向上とその技術の全国平準化に取り組んでいます。
柔道整復術のスキルアップや医療機関と連携した取り組みを掲載します。
今回は、国際救護活動について紹介します。

トルコ・シリア地震に対する 国際緊急援助隊 医療チームでの活動報告

北海道柔道整復師会 塩見 猛
神奈川県柔道整復師会 森 倫範

令和5年2月6日、トルコ共和国南東部カフラマンマラシュを震源とする甚大な地震被害に対し、トルコ共和国政府から要請を受け、日本政府は国際緊急援助隊(JDR)救助/医療チームの派遣を決定しました。

トルコ・シリア地震による震源地付近の被害状況は、マスコミの映像や写真で見るとような激甚なものでした。多くの建物が倒壊し、さまざまな施設が運営できない状況になる中、医療も例外ではありませんでした。トルコ南東部の震源地に近接するガジアンテップ県オウズエリ地区の地震被害状況は震源地ほどではありませんでしたが、現地の国立病院は地震の影響で建物の継続的な利用が難しいと判断され、医療を提供できない状態でした。国立病院関係者は現地の早急な医療サービス復帰を目指し、政府と協力して近隣の職業学校の校舎に仮設診療所を設置し、地域住民のための医療活動を継続していました。施設は仮設のため画像検査等の設備も間に合わず、十分な医療を提供するための準備が十分ではありませんでした。

医療チームの先遣隊は現地に先行し、現地の実情とWHOなど国際機関の情報から議論を重ね、現地の医療ニーズを考慮し、この仮設診療所の駐車場にJDR医療チームの大規模展開を決めました。個人的にJDRに所属をしていた我々は医療チームの1次隊と2次隊の医療調整員メンバーとして応募し、震源地近くのガジ

アンテップ県オウズエリ地区に派遣されました。

今回は、被災地域・国際協力という現場で2人がどのような活動をしてきたかの報告を通じて、柔道整復師の未来への提言を綴ります。

(補足) 国際緊急援助隊(Japan Disaster Relief:JDR):JDRは、その前身であるJMTDR(国際救助医療チーム)が設立し、今年で40周年を迎えます。1987年のJDR法成立後は今回のトルコ地震を含め、医療チームは62回の派遣を誇る国内外の災害関連機関の中でも有数の経験と能力を兼ね備えています。医療チーム:医療チームは、被災者の診療にあたるとともに、必要に応じて疾病の感染予防や蔓延防止のための活動を行います。メンバーは個人の意志で登録している医師、看護師、薬剤師、医療調整員の中から選ばれるのに加え外務省の職員やJICAの業務調整員から編成されます。
(JICA HP : <https://www.jica.go.jp/jdr/about/jdr.html> より一部引用)

1) 1次隊派遣

塩見 猛(北海道柔道整復師会 小樽ブロック、日本柔道整復師会 防災対策室 所属)

医療チームの1次隊、ロジスティクス部門として派遣された私は約3週間の派遣期間で前半はロジスティシャンとしてチームの裏方としての活動を行いました。後半は柔道整復師としても活動しました。負傷した隊員への施術として足関節捻挫や急性腰痛症等への対応を行い、被災者へも柔道整復術の手当を行いました。

被災者の症例としては、右第5中手骨骨折疑いに対し医師と共にシーネ固定を行いました。膝内側側副靭

帯損傷では日本から携行したシーネが使えないため急遽、段ボールと布テープによるシーネを作成し包帯固定を行いました。また、膝関節水腫に対しては、その場にたまたま合った材料を利用し厚紙副子を作成、包帯と共に圧迫固定をしました。

長期に渡り避難所生活や車中泊によるケガも増えつつあり、不活性化による筋硬結や関節拘縮も多くあり、柔整マッサージや運動指導を行いました。

地震によりもともと受診していた病院が被災し治療を受けられない方も多くいました。コーレス骨折や鎖骨骨折の変形治癒や上腕骨骨折で骨癒合していない方も存在しました。ここでも柔道整復術が必要となりました。施術を受けたトルコの被災者や付き添いのご家族から大変丁寧な感謝のお言葉を毎回いただきました。痛みが小さくなったり、関節可動域が広がるにつれ皆さん表情が明るくなり、明日への希望や生きてゆく活力の一助となれた気がします。

災害急性期にはやはり無くてはならない職種であり、被災地で活躍できる柔道整復師がより増えることを望みます。



2) 2次隊派遣

森 倫範(神奈川県柔道整復師会 湘南支部、日本柔道整復師会 防災対策室 所属)

私は令和5年2月23日にトルコ地震へのJDR医療チームの2次隊として派遣されました。JDR医療チームの中に「柔道整復師」としての登録項目はありません。私は医療調整員として登録し、ロジスティックス部門を担当しました。私の2次隊での主な役割は電力部門の担当として、手術室・分娩室を

完備した施設の配電と電力供給の管理が中心でした。他にもガソリンや灯油、発電機の管理だけではなく、大規模に展開したテントのメンテナンス、トイレの運用や隊員の食事やシャワーの準備など、目まぐるしくチームを支える活動をしました。

現地について一番驚いたのは、1次隊のリハビリ部門で塩見先生が活動していたことです。柔道整復師でJDRに所属し、継続して訓練を受けている登録者は、私の知る限りでは私と塩見先生の2名だけです。その1名がトルコの災害現場で活動するJDR医療チームとして現地の患者に手技療法を実施していたのです。その1次隊メンバーが帰国するにあたり、2次隊では仲間の理解もあり、私とその役割を引き継ぐことになりました。

ロジスティックス部門の業務だけでも大変な中、担当業務をこなしつつ、1・2次隊の隊員皆さんの協力を得て、心優しいトルコの皆さんの為にリハビリ部門で活動できたことは「一生の財産」となりました。1次隊帰国後も、私は外来部門で骨折や靭帯損傷の固定具作成のサポート、さらにキャンプサイトで隊員の緊張をほぐすための「支援者の支援」を目的とした施術時間も設けることもできました。JDRメンバーと現地での活動を通じて、職種を超え同じ目的を目指す仲間と共に活動でき、その仲間と活動後も連絡を取り合える関係が築けたことは、本当に人生の貴重な財産です。

今回の活動を通じて、自らの手でケアができる私たちの職種の特性は、医療資源の少ない災害等の現場でこそ役立つものだと確信しました。

今後、私達の仲間や未来を目指す学生さん達がJDRに所属し、柔道整復師の隊員仲間が増え、JDR医療チームをはじめとする災害医療現場での活動を一部でも担い、世界に向けて柔道整復術を発信できることを願っています。

